

普天間問題の 解決はすぐにも も可能だ

リアリズムにもとづく 安全保障の選択

やら・ともひろ 衆議院議員、民間シンクタンク「新外交イニシアチブ」評議員、一九六二年
沖縄県生まれ、フリーランスの国文学者、後、沖
縄タイムズ社。主に沖縄の基地問題を担当し、
編集委員、社会問題を歴任。二〇一二年に退職後、
屋良朝博 沖縄国際大学非常勤講師、ほろを
愛する。

とが明るみに出て、プースター落下をコントロールするシステム開発に巨額の追加経費と一〇年以上がかかることが分かった。政府はイースアジアシヨアの配備計画を断念した。

防衛装備は本来、防衛省側が調達を判断してきた。それが安倍政権になって防衛省の主導権が弱まり、また検討段階の装備品にいきなり予算が付き防衛省が仰天するケースもあるという。どう使うかさえ定まらないまま購入した高額な装備もある。米国防府に支払いを済ませてから一〇年近くも納品されていない防衛装備品さえあるのだ。そんな野放図な防衛政策の中で、イースアジアシヨアに匹敵する不
思議な事業が名護市辺野古の埋立事業だ。

米海兵隊普天間飛行場が住宅地の真ん中にあり危険だから、辺野古崎を埋め立てて滑走路を造り、移転する。政府は「一日も早く普天間の危険性を取り除く」ためというが、完成までに最短で二三年もかかり、工費は約一兆円に膨らむ。二〇一九年二月の県民投票では反対が七二％だった。絶滅危惧種のシエロンが棲み、海洋生物五八〇〇種余が生息する多様性豊かな自然を破壊する。

辺野古はイースアジアシヨアに勝るとも劣らない無理筋の事業だ。防衛装備のおかしな調達実態を含めて日本の「現実主義」にリアリズムが感じられないという矛盾は、もはや限界を超えている。そんな矛盾さえもこの国の政府は

「辺野古埋め立ては沖縄の米軍基地問題を軽減する唯一の選択肢である」と自民党政府は繰り返す。この言葉に現実味を感じないのはなぜだろう。イースアジアシヨアを止める合理的な判断ができるのなら、辺野古はなおさら不合理であり、即時中止すべき怪物事業だ。これからコロナウイルス感染症と闘い、共存する世界で生き抜くには、よりシビアで合理的な政策評価、選択が不可欠になるはずだ。

高次現実主義 (ハイ・リアリズム)

「これが現実的対応だ」といった言葉に私たちは何度騙され、裏切られてきたことだろうか。そして合理的な評価や適正手続といった大切な民主プロセスが軽視されてきた。

イースアジアシヨアもそうだった。北朝鮮によるミサイル発射実験が頻繁に行なわれ、脅威が高まる中で導入が決定された。防衛省は「二四時間・三六五日、切れ目なく、長期にわたって」日本を守る防衛体制の柱になると宣伝した。

ところが配備場所の選定で防衛省は実地調査を行わず、「ターゲットス」を使い縮尺を誤って計算した。当初二〇〇〇億円と公表していた予算は関連施設を含めると六〇〇〇億円に膨らむことが後になって判明した。しかも防衛省はプースター(推進エンジン)が燃焼後に住宅地に落下することはないと地元の説明したが、それが不可能であるこ

「現実的対応」という一言で国民にゴリ押しする。

日本と同じ現実主義でも対中スタンスが真逆のフィリピン。「中国と戦争なんてできるわけがない」と喝破するトラウテルテ大統領は保守政治家だ。昨年夏、国会議員になっただばかりの筆者は南シナ海の領有権争いをフィリピン政府がどうマネージしているかを知りたくて、フィリピンへ飛んだ。マニラにある防衛省施設を訪ね、国家安全保障会議議長ヘルモヘネス・エスベロン氏に会うことができた。

南シナ海での中国の軍事行動は大きな安保上の課題ではないか、とエスベロン氏に質問した。

「あなたは戦争ができますか」と問うてきた。

筆者はとっさの逆質問に気後れしながら首を横に振った。そしてエスベロン氏が続けた言葉に意表を突かれる。

「私は飲茶(チヤ)が好きです。ハンバーガーもよく食べます。寿司もキムチもおいしいですね。たまにはウォッカもいい。それでいいじゃありませんか」

フィリピンの防衛力は長年、反政府テリラとの内紛に対応するための装備でしかなく、戦闘機や艦艇の防衛力はほとんど整備されていない。南シナ海で中国が人工島を造り、軍事的圧力をかけていることへの有効打など持ち得ない。「戦争なんてできっこない」というエスベロン氏の言葉は大國に跪くようなニエアンスではない。防衛装備は貧弱で